

hito*yume
インタビュー

巻頭特集

富士真奈美

1970年代、一大ブームを巻き起こしたテレビドラマ「細うで繁盛記」。

その人気の牽引役けんいんとなったのが、それまでの清純派イメージから一転、意地悪小姑役に挑み、多くの視聴者に

「正子(役名)のいじめぶりを見たいがために」と言わしめた女優・富士真奈美さんです。

現在、女優業のほかに、

オペラや俳句の伝道師としても活躍する背景には、ある先生との出会いがありました。



好奇心の芽は どこに眠っているかわからない

一人ひとりの子どもの内に眠っている興味の種を
いろいろな方向から突っついてくれた先生がいました。

自然と親しみ、野山を 駆け回った少女時代

—静岡県駿東郡清水村（現在の清水町）のご出身だと伺っています。どのような少女時代を過ごされたのでしょうか。

6人兄弟の3番目の3女で、すぐ下
が待ちに待って生まれた長男。過度な
期待を受けなくてもいい立場で、のびの
び育ちましたね（笑）。特に男の子の遊
びが好きで、中でも野球は大好き。女
の子ひとりでも男の子に混じって田ん
ぼで日が暮れるまで野球をして遊んで
いました。

一方で、わたしの母は負けず嫌いの
性格だったので、子どもが多いわりには
教育に熱心。テストや通知表をとても
丁寧に見て、成績が下がると夜の9時
ごろまで外に立たされるのよ。ただでさ
え食糧事情の悪い戦後のこと。そんな
ことでご飯を食へ損なったら大変（笑）。
だから勉強もしましたね。

—学生時代で特に思い出に残っている
出来事はありますか。

思い出というよりもっと強く、ある
意味、学校の先生との出会いがわたし
の人生を形づくってくれたのです。わた

しは田舎の村の小・中学校に通っていた
のですが、わたし自身の経験から、「ど
こにいても先生次第でいろんなことが学
べるもんだ」という思いをもっています。

まず、小学校4年生の時の先生。面
白い先生で、小学生に話してもわから
ないだろうということをよく話されて
いました。例えば、「今、新進の画家で
猪熊弦一郎という人がいて、この人の絵
はいいんだぞ」とか。もちろんわたし
ちには、ちんぷんかんぷん（笑）。しかし
「猪熊弦一郎」という名前は覚えるで
しょう。それで少し大きくなると、「あ
あ、先生が言われていた人はこの人で、
こういう絵を描くのか」とつながるわ
けです。

わたしは今、俳句を趣味にしていま
すが、最初に俳句に触れさせてくださ
たのもこの先生でした。とにかく先生
は自分がいいと思うもの
をどんどん紹介してく
れました。今思うと、一
人ひとりの子どもの内に
眠っている興味の種をい
ろいろな方向から突っつい
て、何かがひつかかれば、
それが育っていくかもしれ
ないという、ものすこ
く生きた教育をしてく

ださっていたのだなと思いますね。
そして、中学生の時には、わたしの人
生のターニングポイントに深く関わるこ
とになる「ある出会い」を運んできてく
れた先生が現れました。

オペラに恋した13歳

—それはどのような出会いだったので
しょうか？

中学2年生の時に、東京から男性の
音楽教師が赴任してきました。その先
生が教室に入ってくる時もお酒の匂
いがプーンと漂う。巷のうわさによると、
将来を嘱望されたテノール歌手だったの
が、何らかの事情があつたようで、田舎町
へ音楽教師として流れてきたとか。先生
は教室にいても窓の外のレンゲ畑を眺め
ているだけで何も教えてくれない。でも



高校3年生の文化祭にて。オペラ「手古奈」の手古奈役に扮して(前列右から6人目)富士真奈美さん、後列左から2人目オペラ指導の石垣先生)



唯一してくれたことがあり、それがオペラのレコードをかけたばなしにして子どもたちに聴かせることでした。

ほかの生徒は自由時間のように遊んでいたけれど、わたしはそのころのトップテノール歌手ベニヤミノジューリが歌う歌劇『トスカ』の「星も光りぬ」というアリアが耳に飛び込んできたとたん、その絶唱ぶりに一瞬で心を奪われてしまったのです。特に先生が好んでかけた

イタリアオペラは、男の人が劇的な場面で泣きながらドラマチックに歌うもの。先生は何も言わないけれど、まるで「こういう素晴らしい音楽があるんだぞー」と語りかけてくれているようで。中学2年生にしてオペラに目覚めてしまったわけです。

姉に勧められるまま アンネ役に応募

——オペラとの出会いで女優への道を志すようになったのですか？

結果的には、女優への道を開いてくれたのはオペラなのだけれど、初めから「女優になりたい」と思っていたわけではなくて。当時の東京とわたしが住んでいた田舎とは別世界だもの。それに本が大好きだったので、同じ表現者でもなりたかったのは編集者。でも巡り合わせつであるよね。

高校に進学後、当時、オペラが好きなという生徒は珍しかったから、音楽の先生も興味をもたれたんでしようね。たくさん有名なアリアを聴かせてくださって。その中でわたしがぜひ覚えたいと思ったのが『蝶々夫人』の「アリア」ある晴れた日に」。先生に譜面を貸していただき、それを全部写し取って原語で丸

田舎の教室に流れたイタリアオペラ 運命の扉が開かれた瞬間でした

音楽教師が聴かせてくれたオペラのレコード、それがひとりの少女の人生を変えたのです。

暗記して歌っていました。

そんな様子を見ていたすぐ上の姉が、わたしが高校3年生の時に「就職が決まっていないのなら新聞にこんなのが出ていたのでやってみたら」と勧めてくれたのが劇団民藝*の「アンネの日記」のアンネ役への公募でした。その時ちょうど読んでいたのが『アンネの日記』(笑)で、運命的なものを感じて応募しちゃったの。結局は、最終の6人に選ばれたものの落選。面白いのが、アンネはダブルキャストで、劇団の研究生がひとり目のアンネとして決まっていた。何とそれが、今、わたしの何十年来の親友の吉行和子。もしあの時わたしが合格していたら友達たちにならずにライバルで終わっていたかも(笑)。縁とは不思議よね。

ともかくわたしはまた何事もなかったかのように清水村に帰って前の生活に戻ったのだけれど、すぐあとに転機はやってきました。

——再度オーディションに挑戦したのですか？

高校を卒業した年に、劇団民藝の推薦でNHKの専属女優としてのオーディションを受けることになったのです。女優を目指し芝居の基礎がきちんと

*1950年に滝沢修、清水将夫、宇野重吉らによって「多くの人々の生きてゆく歓びと励みになるような」民衆に根差した演劇芸術をつくり出そうと旗揚げされた劇団。



旧NHKホールにて。デビュー当時の富士真奈美さん(18歳)

とできている応募者ばかりの中で、わたしにできることといえばオペラのアリアを歌うことだけ。でも田舎からポツと出てきた娘がイタリア語で「蝶々夫人」を歌ったことがよほどインパクトをもって伝わったのでしょね。オペラのおかげで合格できて、女優の道へ踏み出したと思っています。

—その後、女優として大活躍されるともに、結婚され娘さんを出産。今度は母親として先生と向き合われたわけですね。

わたしは、子どもとも先生とも、比較的密にコミュニケーションが取れている母親だと思っていたのですが、実は、娘が小学校高学年の時に離婚したあたりから、学校で娘に対するいじめが始まっていたのです。当初は全く気づかず、中学

娘はやめてと言ったけれど 手紙を持って学校へ行きました

先生と親のほどよい関係。

永遠の課題だけれど、双方ともこれを常に考えていることが大事だと思う。

2年生の時にそれがひどくなり娘の訴えて初めて知りました。激怒しましたが、娘にはやめてくれと言われたのですが、いじめの状況をしっかりと記した12、3枚の手紙を持って学校へ行き先生と話したところ、先生もいじめに気づいていなかったようでした。その先生は、生活指導にも自信をもっており、自分が受けもっているクラスでそんなことが起こるはずがないと思っておられました。でもわたしの話をしっかりと聞く耳はおもちでした。その後は、真剣に対応してくださったことで、娘が「あの時死ななくてホントよかった。もう大丈夫」という状態に戻ることができました。

その話し合いの中で今も鮮明に覚えているのが、あの時先生から「お母さん、給食がおいしいから食べていきませんか？」と誘われたこと。わたしも怒ってはいたのですが食べたんです。そうしたらこれが本当においしくて(笑)。後から考えると、ひとつには怒りからは何も生まれなないということ。「わたしを落ち着かせるため」もうひとつは「いつでも何かあったら来てくれていいんですよ」という先生からのメッセージだったと思うのです。

これはわたしにとって言葉以上の効果がありました。もちろんいじめは最初からないのが一番だけれども、小学

コラム

「俳句」で遊ぼう!

“発見する楽しさ”を育てる

2008年から「俳壇賞」の選考委員も務め、俳人としての顔もつ富士真奈美さんに、学校で取り組める俳句の楽しみ方を教えていただきました。

俳句の面白さは、季語を芯に「自分なりの発見」を5・7・5というリズムで表現すること。いろいろな場所へ行って自然の中で、何にでも興味をもって見ていると、自分なりの発見や表現があるので、子どもたちも楽しみながら取り組めると思います。



1 「自然や地域を見て歩く」という宿題を出す

俳句をつくるということを子どもたちには伝えずに、1週間前ぐらいから自然や地域の中で「自分なりに発見し、感じたこと」を5つくらいメモする宿題を出しておきます。

2 5人くらいのグループをつくり、俳句の簡単な説明

俳句とは、5・7・5の音節からなる日本語の定型詩で、最短の詩。この中に「春」「夏」「秋」「冬」「新年」の5つの季節を表す「季語」を必ずひとつ入れるのが基本だということを伝えます。

先生があらかじめ季語を決めておき、みんな同じ季語を使って作るのもひとつの楽しみ方。

3 「発見」をもとに「5・7・5」のリズムで詩をつくる

1の「自分なりに発見し、感じたこと」を「5・7・5」で表現しようとアドバイスします。

4 自分が好きな句に投票する

ポイント

俳句は解釈し合うのが楽しいもの。非常に短い字数で詠まれているからいろいろな想像ができ、つくった本人の思いとは違う解釈が出ることも度々あるので、新しい発見ができます。

例 「泣きたくも なきに泣く子や 秋の蟬」
富士真奈美 作

「秋の蟬」が季語。むずがって泣く子と、もはや弱々しく鳴くばかりの秋の蟬を対比しました。

夢でも趣味でも何でもいい。 ぜひ“自分の感動”を子どもたちに

難しく考えるのではなく、感動を伝えることでいいと思う。
生の体験ほど伝わるものはないのだから。

校高学年から中学生のころというのは、子どもたちの心の中にざわざわと自分でもどう対処しているのかわからないストレスが芽生える時期。やはり先生と親が話をしやすい関係を築いていくことが非常に大事だと思います。

夢の入り口を見つけた時が 何よりの褒め時

——最後に、先生方へメッセージをお願いします。

わたしは、中学生の時にオペラと出会っていなかったら、全く違う人生を歩んでいたかもしれません。これは極端な例かもしれませんが、先生というのは、少なからず何らかの影響を子どもたちに与えているのだと思います。

ご自分の趣味があつて、これはいいものだと思うたら、ぜひ子どもたちに伝えてほしい。特に先生自身が感動したことは、その感動を伴って伝わるわけで、子どもたちの心にびんびん響きますから。何だかいい。子どもたちにはそれぞれ個性があるわけで、何に反応するかはわかりません。反応したら先生も楽しいでしょう。そしてその楽しさはまた子どもに伝わります。

そして、子どもたちが入り口を見つ

けた時、ぜひいっぱい褒めてやってください。何でも入り口がとても大事。わたしは俳句に出合えたこともオペラとともにかげがえのない財産だと思つています。俳句が楽しくなつたのも、これまで続けてこられたのも、その入り口で褒めてもらったからだと思います。20代後半で本格的に始めた時、先生は一切けなさず、その句のよさを見つけてくださり、褒めてくださった。「うれしい」という思い、これが何よりもはげみになつたと思います。

もうひとつ、物を「教える立場」と「教わる立場」というのを、やはり先生が意識して子どもたちと接してほしい

と思います。学生時代だけでなく、人生は常に学びの場です。「学ぶ」ことの大切さを知り、「学ぶ」心構えを身につけられるかどうかで、人生を豊かにしていく可能性を広げられるかどうかが決まると思いますから。

富士真奈美(ふじまなみ) プロフィール

女優。静岡県生まれ。1957年、NHKの専属女優となり、「この瞳」で主演デビュー。俳優座養成所卒。TV「細うで繁盛記」、映画「切られ与三郎」「小林多喜二」など。74年に結婚、84年に「再独身」となり女優復帰。最近では「ハゲタカ」や「つばさ」などテレビや舞台上で活躍する一方、随筆家、俳人としても活躍。2008年より「俳壇賞」の選考委員を務める。

